

## 因幡の麒麟獅子舞

原島 知子 著  
鳥 取 県

【書評】原島知子著『因幡の麒麟獅子舞』鳥取県史ブックレット22 鳥取県刊

A5判 一〇三ページ 頒布価格五〇〇円

酒井 董美

ただよし

著者は鳥取県教育委員会事務局文化課で、民俗文化財主事として民俗文化財の保護や調査にあたった。その中でまとめ上げたのが本書である。古文書を含む文献や丁寧な悉皆調査で、当地独特の麒麟獅子舞の全容に迫った好著である。

内容であるが、「はじめに」「おわりに」を別として次の四章から成っている。「一、麒麟獅子舞の定義」「二、麒麟獅子舞の成立と展開」「三、麒麟獅子舞の地域への広がり」「四、地域の中の麒麟獅子舞」。

麒麟獅子舞は、鳥取県東部から兵庫県北東部にかけて存在している。例外としては明治初期に北海道へ移住した人々が伝えた三事例や広島市東区の広島東照宮が認められる。この麒麟獅子舞は、神社祭礼で奉納され、氏子の家々を一軒ずつ清めて回る門付けを行うところも多い。該当地域の人々には、親しく懐かしい民間芸能であろう。

ところで、麒麟獅子とは中国の想像上の霊獣である麒麟を思わせる獅子頭を用いた獅子で、これまた想像上の動物で前触れを役とした狸々と一對となって舞を行っている。

起源であるが、慶安三年（一六五〇）に鳥取藩初代藩主・池田光仲によって創建された鳥取東照宮の祭礼行列に始まるという口伝はあるが、文献資料が見られない。著者は各地の伝承から、鳥取東照宮→主要な神社→各地の神社、このような形で広がったとしている。それも飢饉退散、コロナなどの病氣祈禱、災害防止などの願いを込めて、麒麟獅子舞が各地に導入されたようだとしている。そして紆余曲折を経ながら、平成三十年末現在、麒麟獅子舞は一二八頭あり、同じ麒麟獅子舞で複数舞われ奉納されていることから、神社数では一三五社になるといえる。

また、舞手であるが、かつての男性専任の風習は、時代が下るに従って次第に変化し、今日では女性が参加するところも現れた。女性の舞は優雅でよい雰囲気醸すようで、鳥取市伏野と岩美町大谷でも、女性が獅子頭を務める機会が出てきている。いずれも親が関係者で小さいころから獅子頭に親しんでおり、自ら志願して勤めるようになったという。

鳥取県東部を中心として存在する麒麟獅子舞の本質と、変容について、分かりやすく説いた本書である。多くの鳥取県人の必読書としてお薦めしたい。（元鳥取短期大学教授）